

今に生きる理想

木村峰行

要するに直寛は、北海道に自治の気性を喚起し、自治区を設立し、もつて国民自治の基を開くべしと説いたのである。直寛は、北海道を、開拓の地であるのと同時に、自治の確立、新しい国つくりという、ふたつの理想の実践を試みたのである。



幕末の志士・坂本龍馬は、大政奉還

実現後、北海道開拓に新たな志を決めていた。しかし、志を行動にうつすことなく、世を通り過ぎていった。

龍馬の志を受け継いで、クンネップ

原野（現・北見市と訓子府町）にはじめて鍬をおろし、北光社農場の社長となつた土佐の民権家・坂本直寛は龍馬の甥にあたる。直寛は、北海道に模範

的な国を建設しようとの目的を持つて、

一八九六年（明治二十九年）に、クンネップ原野を視察、北光社移民を決定した。

直寛はこの年の八月一〇日、札幌で新渡戸稻造札幌農学校教授らと「北海道

の発達」について講演している。

「北光社」の設立の動機と理由、思想と理想、目的と使命を具体的な政策として

して説いた講演である。

直寛は、当時の北海道の拓殖・開発の実効の上がらない理由は、政府も民間も拓殖に対する確固たる構想と政策

を欠いているからだと批判した。

直寛は続ける。北海道の健全な発展・進歩は、正直な勤労、干渉や遠隔操作の排除、開拓者の自由と独立。北海道

と開拓民は、独立自治の精神を涵養し、

内地（本州）に依頼・依存すべきではないと強調した。

一方、一八八七年（明治二〇年）夏、
条約改正問題をめぐつて政界は大混乱、
「地租軽減、言論・集会の自由、外交



失策の挽回」を求める請願・建白が全國から殺到し、民権論が再び沸騰する。その総代となつた直寛は逮捕され、一年三ヶ月収監の身となつた。直寛はこの獄中で、拓殖事業を經營する決意を固めた。直寛はいう、日本の眞の民主化の道は、個々の人間改革と革新された人間の自主独立なしにはありえない。その後、直寛は政界から去り、北海道開拓に希望を託したのである。

フロンティア精神、かかわる主体は農業、古いしきたりや人間関係、国や地域の細かい制度に縛られることなく、広い大地に自由に自らの絵を描くことができる？大きな夢であり理想である。七〇安保闘争さながらの学園紛争の時

など、数多い。ロシアの蝦夷地南下に備えた屯田兵制度は、現在の札幌市、旭川市、北見市など各地に入植した。これと平行して、一般移民や大農場の開設など、北海道開拓は明治時代の国策として一大事業であった。さらに、第二次大戦中の東京・大阪などからの疎開先としての受け入れ。戦後、旧満州をはじめ、樺太など、海外引き揚げ者の受け入れと、様々な目的で、北海道開拓は国策としての事業を取り組んできただといえる。

北海道が提供している。北海道への理想と希望、そして憧れは、過去から現代、そして未来へと続していく。

しかし現実は、国主導の道州制、市町村合併、道主導の支庁再編、権限移譲には、夢も希望も沸かない。あるのは、上からの圧力と地域の疲弊である。このような閉塞感が世の政治情勢を生み出している。

龍馬の北海道開拓、それを継承した直寛の目的と理想に学び、あらためて北海道の行く末を考えることも必要だと思う。国際的な規模の不況、気持ちに何かしら余裕の持てない世相。しかし、今一度立ち止まり、地べたに座り、ゆっくり北海道らしい生き方を展望するときではないか。幕末の志士・龍馬、明治の民権家・直寛の新天地北海道に託した理想は今も生きる。生きなればならないと願うのである。

明治以降、幾多の北海道開拓が試みられた。最初に、明治新政府に反旗をひるがえした藩の移住先としては北海道の、現在の伊達市や厚岸町太田地区

代にも、北海道に憧れと夢、その実現に北海道キャンバスで学んだ青年達も還暦を迎えた。

べきむら みねゆき・北海道議会議員